2023年6月11日 佐土原キリスト教会 礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書3章13～17節
説教題：信仰生活の原点

カナダにいる時に、ある英語の教会の先生と2人で話す機会がありました。その教会は「洗礼は『浸礼―(ズブンと頭まで水の中に浸かる形式の洗礼)』でなければならない」という教会だと聞いていましたので、良い機会だと思い聞いてみました。「なぜ洗礼は『浸礼』でなければならないのですか」。その先生は言われました。「イエスも頭まで水の中に浸かっておられるだろう。だから洗礼の時は頭まで水の中に浸からなければダメなんだよ」。そう聞くと、「滴礼」で洗礼を受けた私としては、素直に「そうですよね」と言えないものがありました。今日の個所を読むと、イエスが水の中に入られて、そこで洗礼を受けられたことが分かります。しかし、ズブンと頭まで浸かられたかどうかは、はっきりしません。原文は「バプティゾー」という言葉の変化形で、「バプティゾー」は「水に浸す」という意味ですが…。またある英語の「スタディー・バイブル」は、「『水から―(「川から」ではない)―上がられた』と言うのだから、ズブンと浸かったことは明らかである」と説明していましたが…。しかし、何かの絵で見たことがありますが、「イエス様が川の中に腰まで浸かって頭から水をかけてもらった可能性もあるのでは…」と言いたくなります。(「滴礼」で洗礼を受けた者の僻みでしょうか…)。というより、洗礼の形は色々あって良いのです。イエス様がどういう形で洗礼を受けられたかも、それほど拘る必要はないと思います。大切なのは、「イエスが洗礼を受けられた」という事実であり、そこにある意味(メッセージ)です。今朝も「内容」と「適用」と、お話しします。

1：内容～主イエスの受洗の意味

バプテスマのヨハネがヨルダン川で人々に「悔い改め」を語り、洗礼を授ける、その信仰覚醒運動を始めてから、どれくらい経った頃でしょうか、ガリラヤのナザレでひっそりと生活しておられたイエスが、ヨハネのところに現れなさいました。イエス様は、ヨハネの噂を聞き、「自分が立つ時が来た」と思われたのかも知れません。ヨハネの許に現れたイエス様は、群衆の中に混じってヨハネから洗礼を受けようとされました。ヨハネには、イエスこそが待っていた「私のあとから来られる方―(裁き主)」(11)であることが分かりました。「神の裁き主」であれば、イエス様に罪はない。実際にイエス様は、「神の子」として罪のない方でした。ヨハネが呼びかけたのは「罪の悔い改め」であり、「悔い改めのしるし」としてのバプテスマでした。そうであれば、イエス様は、バプテスマを受ける必要はない。いや、そんなことがあってはならない。だからヨハネは、戸惑って言いました。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずですのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか」(14)。なぜイエス様は、バプテスマを受けようとされたのか、いや、受けられたのでしょうか。

ユダヤ人は、「神の裁きが為され、『今の世』が終わって、『来るべき世』が始まる時」を「主の日」と呼んで、一方で恐れ、一方で「自分も『来るべき世』に入って、そこで生きること」を、期待もしていました。ヨハネは「『私のあとから来られる方(イエス)』が現れる時が、その『裁きの時』だ」と考えました。その「裁きの時」、「御心に敵う歩みをしていない全ての人は、その裁きに耐えられない」、だから「悔い改めよ」と叫んだのです。(しかし実際は、その「裁きの時」は、イエス様が2回目に現れる「主の再臨の時」だったのです。その時こそが、地上の全てのことが裁かれる時です。しかしこの時、ヨハネにはそのことが見えていません)。イエスが現れたことで、その「裁き日」がいよいよ近づいたと思ったのです。

ヨハネは、人々に「聖人君主になれ、完全無欠になれ」と言ったのではないのです。「人として神の前に正しく立て」と説いたのです。「神の前に正しく立つ」とは、例えばそれは「本当に神を畏れること。神を畏れて自分の罪を恥じること。もし罪を犯したら、それを告白して悔い改めること、神の御言葉に歩もうとすること、死に怯える時には、そこで死を超える神との永遠の命の交わりを確信すること…」そういうことだったのではないかと思います。しかし、誰がその「神の前の正しさ」に生きているのか。だからヨハネは「裁き」に備えるように、叫んだのです。

しかしそんな中、イエス様は、ヨハネの思いとは、全く違う形で登場されたのです。イエスの洗礼の申し出に戸惑うヨハネに、イエスは言われました。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです」(15)。この「わたしたち」というのは、第一義的にはイエスとヨハネのことです。そこで、この言葉を、ある神学者は、こう言い換えています。「ここで私に洗礼を受けさせることで、あなたと私とで神の意志を成就するのです」。イエスは、ご自分が洗礼を受けることで、「神の御心が成就される」と言われるのです。では、「神の御心」とは何でしょうか。

イエスが水から上がられた時、天から声がしました。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」(17)。この言葉は、「旧約」の 2 つの箇所から取られている言葉です。「これは、わたしの愛する子」、これは「詩篇 2 篇」の言葉です。「主は私に言われた。『あなたは、わたしの子…』」(詩篇 2:7)、これはイスラエルで王が立てられる時に歌われた詩です。つまり、イエスが洗礼を受けられた時、ここでイエスは、神から「真の王」として任命を受けられたのです。しかし、その「王」は、どのような「王」であったか。もう 1 つ「わたしはこれを喜ぶ」、これは「イザヤ書 42 章」の言葉です。「見よ。わたしの支えるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者…」(イザヤ 42:1)。神に選ばれた「神のしもべ」を描く詩です。この詩はやがて 53 章に至って「神のしもべ(子)が、苦しみの中で『罪人の 1 人』に数えられて、そして罪人の罪を自分の身に引き受けて死んでしまう、しかし死ぬことによって神の御心を成し遂げる、自らも喜んでそれを引き受ける」、そのような姿を描くのです。

ヨハネは、神の裁きの時、「人は本当に神の前に、あるべき姿として立つことが出来るのか、裁きに耐えられるのか、いや出来ない」と(いわば)絶望しながら、それでも必死に悔い改めを叫び、悔い改めのしるしとしてのバプテスマを授けました。しかし、やって来られた「私のあとから来られる方」は、ヨハネが考えていたような「激しい裁き主」ではなかったのです。神に任命されたその方は、罪人の側に立ち、人々が結局成し遂げられない「あるべき正しい姿で神の前に立つ」というその「成し遂げられない部分」を補うために、人の罪を背負い、人に代わって裁きを受け、人に救いの道―(神の裁きを通り抜けて天国に入って行く道)―を造って下さる「救い主」だったのです。「裁き主」ではなく、「救い主」だったのです。そのために罪人になり切り、罪人として―(罪人の代わりに)―「悔い改めのバプテスマ」を受けるところから、その公生涯を始めなければならなかったのです。だからイエス様は、洗礼を受けられたのです。それを神は喜ばれたのです。

2：適用～悔い改める

この箇所は、私達に何を教えるのでしょうか。イエス様が公生涯で人としての歩みを始められた時、人を救う歩みの最初になさったことは、「悔い改め」のバプテスマを受けることでした。つまり「悔い改めること」だったのです。つまり私達も、信仰生活の第一のこととして、悔い改めることを大切にしなければならないということではないでしょうか。

「ある方が初めて教会に行った時、牧師に『あなたも罪人です』と言われ、それから 2 度と教会に行かなかった」という話を聞きました。わざわざ教会に行って、「あなたも罪人ですよ」と言われて、喜びに溢れるはずがありません。だから私もあまり強調したくはないのです。しかしイエス様は、公生涯を、私達の罪を背負うようにして悔い改めのバプテスマを受ける、まずそこから始めて下さったのです。そうであれば私達は、自分の罪を問わないわけにはいかないのです。

確かに私達は、自分の罪を悔い改め、それを赦され、神に迎えて頂きました。感謝です。しかし、赦しては頂きましたが、罪から全く解放されたわけではありません。相変わらず、罪の生活を続けているのではないでしょうか。しかし、赦されたことの恵みが大き過ぎて、自らの罪の姿を、イエス様ほど深刻に考えなくなってしまっている面はないでしょうか。

先週も申し上げたように、人と比べると自分の罪の姿はあまり分からないかも知れません。「世の中には酷い人もいる。私なんか善人の部類ではないか」と思ってしまいます。しかしヨハネも、問題

にしたのは神の前の姿です。私自身が個人的に示されているのは、神に対する不信仰です。自分にとって嬉しくないこと、納得のいかないこと、辛いことが起こると「神は私を見放されたのか、私には関わって下さらないのか」と思ってしまうことが多いのです。「神は、私の神であることを止められることはない」、その恵みの真理に逆らう不信仰です。あるいは時には、神様の恵みよりもサタンの力の方が強いのではないか、そう感じてしまうこともあるのです。鬱の時がそうでした。神に対する不信仰、それもヨハネが戒めた罪です。

神様は私達に、本来どのような姿を求めておられるのでしょうか。「マタイ 5 章」に「八福の教え」というイエス様の教えがあります。イエス様は言われました。。「心の貧しい者は幸いです…悲しむ者は幸いです…柔和な者は幸いです…義に飢え渇いている者は幸いです…憐み深い者は幸いです…心のきよい者は幸いです…平和をつくる者は幸いです…義のために迫害されている者は幸いです」(マタイ 5:3～10)。言い換えれば「『あなたは、ただ神の恵みと憐みにすがる他にないという自覚を持っているか』、『あなたは、罪を悲しんでいるか』、『あなたは、あなたの心を神に支配して頂くことを願っているか』、『あなたは、神に感謝し、少しでも神の御心に応えようとしているか』、『あなたは、神に憐れまれている者として他の人の弱さに対して憐み深くあるか』、『あなたは、一つ心で神に対して誠実であり、人に対して誠実であるか』、『あなたは、本当の赦しと和解を造り出そうとしているか』、『あなたは迫害されるくらいまで、それらの生き方に打ち込んでいるか』」。そういうことを、私達は問われているのではないでしょうか。いかがでしょうか。あるいは「1 コリント 13 章」には有名な「愛の教え」があります。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます」(1 コリント 13:4～7)。私達に、この品性があるのでしょうか。そう考えて行くと、神様の求めに生きていない自分の姿が見えて来るのではないでしょうか。いかがでしょうか。

さらに私達に罪の姿を教えてくれるのは、罪を大きなテーマとして小説を書き続けた三浦綾子さんの言葉です。「自分は正しい、自分は偉い、自分はいい人間だと、自己を絶対化していることのいやらしさ、それがわれわれなのだ」、「私達は常に、尺度を 2 つ持っている。『人のすることは大変悪い』、『自分のすることは、そう悪くない』、この 2 つのはかりが心の中にある。つまり『自己中心』なんだ。『自己中心』の尺度でものごとをはかる限り、自分は悪くないのである。なぜなら、それは『自分のすることは、そう悪くない』というものさしなのだから。それどころか『自分のすることはすべて良い』というものさしを持っている人さえいる」、「正しい言葉は人の耳に痛い。親にでも、兄弟にでも、また友人、職場の同僚にでも、ちょっと注意されただけでカッとなり、憎くなるのが人間である」、「9 つまで満ち足りて、10 のうち 1 つだけしか不満がないときでさえ、人間はまずその不満を真っ先に口に出し、文句を言い続けるものなのだ」、「私達人間は、本来、自分が損をしないように生きようとする存在だ。快く生きたい。楽をして生きたい。得をするように生きたい。これが大方の人間の姿なのである」(ルターは「人間はあらゆることにおいて自分の利益を求める」と言いました)。「人間とは誰しも底意地の悪いものだ。外には出さなくても、棘を含んで生きているものだよ」。「人間というものは、言ってみれば、存在そのものが罪なんだ。今天使のような心を持っていたとしても、1 分後にはふっとよからぬ思いが胸をかすめる。そうしたどうしようもない存在だからこそ、神の子であるキリストが、僕たちの罪を背負って、代わりに死んで下さったのだ」。

私は、人間の罪の姿を描いて悦に入っているのではないのです。私達が罪の中を生きていることを再確認したいのです。なぜなら、罪を自覚する時、私達はヨハネのように絶望するのではなくて、イエスがおられるから、神の前のそんな大きな罪も赦されたこと、赦されていることを、改めて感謝出来るからです。私達から感謝がなくなっている時、それは赦しの大きな恵みの中にいることを忘れてしまっている時ではないでしょうか。

私は、洗礼を受ける時でさえ、自分が罪人であることが分かっていませんでした。口では言いました。しかし、本当に自分の罪を悲しみ、心から悔い改めるということはなかったのです。問題の中で

「助けて欲しい」と思って教会に飛び込み、助けてもらった、そこから始まった信仰生活でした。そこに留まっていた信仰生活でした。だから、信仰生活に喜びがありませんでした。しかし就職して、大きな失敗をしました。同僚にも挨拶もしてもらえない、避けられている感じでした。その中で私は、その原因が自分の中にあったこと、その状況は自分が造り出していることがやっと分かりました。苦しくて誰かに赦して欲しかったのです。でも人の心はどうすることも出来ませんから、とにかく神様に赦しを求めました。初めて真剣に悔い改めの祈りをしました。その時、神は教会を通して「赦し」を語って下さいました。そして、そこから神の恵みが分かり始めました。キリスト教が言っていることが分かり始めました。「悔い改め」が私達を神に近づける、そのことが、理屈よりも、むしろ経験的に分かります。

だから今朝、私達が相変わらず持っている罪を自覚したいのです。そしてその私達を―(あなたを、私を)―救うために、イエス様が公生涯を始めて下さったこと、その最初に私達のために「悔い改めのバプテスマ」を受けて下さったこと、そのようにして私達と 1 つになろうとして下さったこと、私達の身代わりになる歩みを始めて下さったことを感謝したいのです。そして私達のその大きな罪が、それでも赦されるために、やがて十字架に架かって下さったことを感謝したいのです。その十字架のゆえに、私達がどんなに罪深い者であっても、今日も、赦されて―(過去も赦されて)―在れることを、その恵みを感謝したいのです。そして、その赦しの恵みがあるからこそ、「悔い改め」において鈍くならないようにしたいのです。

私は、申し上げたように、個人的に不信仰を悔い改め続けたいと思っています。神は「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っている…それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり…将来を希望を与えるためのものだ」(エレミヤ 29:11)と言われました。「私達の将来は―(自分の中にではない)―恵みの神の御手の中にある」、それを信頼する、「神が私を見放されることはない」、その信仰から外れたら、悔い改めを続けたいと願うことです。皆様は、今、どういうことを示されておられるでしょうか。お互いに「悔い改めること」を大切にして行きましょう。それが私達を、神様に、神様の恵みに近づけます。